

・・・がんの鍼灸治療について・・・

——抗がん剤の副作用に対するの鍼灸治療——

抗がん剤の副作用は、個人差により現れ方が違います。

・副作用も、吐き気、手足のしびれ、手足の冷え、だるさ、手足に力が入らない、頭痛、食欲不振、不眠、など様々です。

鍼灸治療も始める時期も様々です。

- ・抗がん剤治療後のしびれや痛みが現れてから始める場合
- ・抗がん剤を行う前に副作用が現れない様に予防的に始める場合
- ・がんの再発などで治療法がない場合
- ・がんが進行していてステージを少しでも改善をする場合
- ・自身の免疫力（体力など）などを高める場合

がんの代表的な治療方法（3代治療法）には、手術（外科治療）、薬物療法（抗がん剤治療）、放射線治療の三大治療に加え、免疫治療、温熱療法、代替医療（補完医療ともいう健康食品やサプリメント）などが存在します。また、第4のがん治療とも呼ばれる免疫治療の一種である「免疫チェックポイント阻害剤」が保険適応になるなど、治療の選択肢が広がってきている。今では、がん治療の情報はあふれています。どんな情報を選ぶか、どんな治療法を行うか。自分には合っているか。悩み・迷いが尽きないのが現状です。

鍼灸治療をとっても、1つの選択肢にしかなりません。何より、どんな治療法を選んでも治すのは自分のからだの細胞です。自分で治る気持ち、治そうとする気持ちが何より大切です。もし、がん治療で悩まれている方は考えてみてください。手術や薬ががんを治してくれると考えていませんか。もちろん、手術や薬で治りますが全てではありません。何より、大切なのは自身で治そうとする力です。生活のリズム、食事の取り方、気持ちの持ち方などが見直すことが大切です。鍼灸治療が、少しでもお役に立てるようにお手伝い出来たらと考えています。ありがとうございます。

●がん治療の情報-1

2017. 6. 30に行われた大学病院院内症例検討会で、肝臓がんステージ4で入院されている患者さんへ鍼灸治療を3ヶ月行い、がんステージが2になったとの報告がありました。担当した放射線科の先生によると、抗がん剤は使わず、鍼灸治療でT細胞が明らかに増えたとのこと。鍼灸治療により、副交感神経を高められることがキーポイントと言えるようだ、とのこと。これは、鍼灸治療が1つの選択肢の可能性を示すものと考えられます。

●がん治療の情報-2

・・・急性リンパ性白血病に対してのお灸治療は何をもたらすか・・・

この症例は、いろいろな条件が重なり白血病に対してお灸治療の経過で変化が見られたことはとてもレアなケースかと思えます。このように似た状態が起きている場合に何かの参考になればと思い、患者様のご理解のもと経過（お灸治療）とデータを公開させていただきます。

経過について考えられること

- ・急性リンパ性白血病と診断されたが、白血病で見られる症状がなかったこと。
- ・白血球が8万に増えた2日後から1回目のお灸治療を始めたこと（白血球は1ヶ月前から増えていたと思われる）。
- ・2回目のお灸治療を行った後の白血球数が4万8,000に減ったこと。
- ・食事の改善（血液検査から）、生活の改善（環境）も行ったこと。
- ・急にお尻の痛みが強くなり（この時白血球は6万）、疼痛コントロールで4日入院し白血球が7,000（白血球が8万に増えたから24日目には7,000になった）に下がったこと（お尻の痛みが白血病によるものかは分からないこと）。
- ・白血球が正常範囲になっても、白血病細胞は身体の中に存在しているので体調維持するためにお灸を行うこと。
- ・お灸治療の目的は、体力（免疫）を向上させ、感染症にかかりにくくすること。白血病では、白血病細胞を減らすことが大切ですが、免疫力低下による感染症の予防が何より大切と考えられること。
- ・いつまた、急に白血球が増えるか分からないのでその時の対象を考えてお灸治療を行うこと。

【症例】

89歳，男性，理容師，身長：158cm，体重：64.5kg，体温：36.9℃，血圧：140mmHg—93mmHg（降圧剤服薬），既往：15年前に側頭動脈炎（薬物治療で治癒）

【経過】

20x1年11月24日

定期的な健康診断（近隣の病院）で異常はなかった。

血液検査値：アルブミン 3.7L，尿酸 6.7，LDH181，CRP3.38H，赤血球数 449 (10⁴)，HGB13.2L，白血球 4320/ μ L，血小板 17.1 (10⁴)

20x1年12月初旬

急に右胸が大きくなってきた。触ってみても痛みやシコリがあるわけでもなかった。それ以外に身体の症状がなかったなのでそのままにしていた。

20x2年1月4日

右胸のシコリが気になり、近隣の病院を受診した所総合病院を紹介された。

鼻血が止まらない話をしたら、血圧の薬を服用しているからその副作用もあると言われた。

20x2年1月5日

総合病院受診

血液検査の結果、末梢血白血球数が8万あると言われ地域がんセンターへ紹介された。超音波検査で胃と肝臓に腫瘍が認められた。

20x2年1月7日 (第1回)

鍼灸治療

背部兪穴—胸骨部ダルマ2個、足三里へ透熱灸5壮、右乳房周囲へ置鍼。

*1月8日からセルフでお灸を始める。背中—胸—足三里へ1日2〜3回。

20x2年1月9日

地域がんセンター受診

右胸胸壁（第5肋骨由来）に腫瘍があり、悪性腫瘍が疑われ、針生検を行った。末梢血白血球数が8万2,300個に増加していることがわかり、そのうちの9割が異常の形態のリンパ球が占めている。血小板減少や貧血も認められた。速報で悪性リンパ腫の可能性が高いと言われた。病気を決める検査として、①全身の造影CT撮影②腫瘍シンチPET撮影③骨髄検査胸壁腫瘍生検では、黄色にかかった液で表面に鮮血が少しあった。

血液検査：アルブミン 3.8L, 尿酸 8.5H, LDH855H, CRP3.62H, 赤血球数 44010⁴), HGB9.0L, 白血球 82.3(10³)P, 血小板 5.0(10⁴)L, 薬処方：抗生物質、痛み止め。

20x2年1月14日 (第2回)

鍼灸治療

督脈穴—胸骨部ダルマ2個、足三里へ透熱灸5壮。後頸部置鍼。触診：頸部—腋窩のリンパ節の腫脹は触知できない。

*臀部の痛み（左<右）は痛み止めを飲めば治まる。

身体所見で頸部—腋下のリンパ節主張は触知できない。

*発熱（微熱）、倦怠感、息切れ、めまい、ふらつき、痛み、出血しやすく血がとまらない、あざがでやすいなどはない。

20x2月1月16日

地域がんセンター受診

右胸壁腫瘍の針生検と骨髄穿で採取した骨髄細胞の解析結果を総合して、悪性リンパ腫ではなく、急性リンパ性白血病と診断された。腫瘍シンチPET検査では、胸椎や腰椎、上腕骨、大腿骨など骨髄への集積のほか、腭頭部や肝臓内にも脂瘤様の異常集積が認められ、腫瘍を形成するタイプの白血病に分類された。高齢のため治療例もなく強力な抗ガン剤は使えないと言われた。しかし、白血病細胞がこのまま増え続けると、血小板減少や貧血がさらに悪化するなどして危険なので、何らかの方法で白血病細胞の増殖を抑える必要があると言われた。抗ガン剤を行わず、輸血等の対症療法だけを行う選択肢のあると言われたが、治療をしなければ余命1ヶ月と言われた。白血病遺伝子検査では、遺伝子転座がないため抗がん剤治療として、VP療法「①オンコビン週1回点滴②プレドニン連日、3〜4

週間内服」を提案された。腹部エコー（肝臓、膵臓）検査と血小板が減少しているため血小板輸血を行った。1月9日の血液検査では、8万2千300個あった白血球数が4万8,000個に減っていた。正常白血球は0と言われた。本日、入院の話をする事になっていたが白血球が減っていることから入院することではなく経過をみる事になった。

*2017年12月中旬から鼻血が止まらずにいた。地域がんセンターの後にて耳鼻科を受診し鼻粘膜が切れているのでレーザー処置して止まった。

血液検査：アルブミン 3.5L, 尿酸 7.1, LDH692H, CRP4.46H, 赤血球数 370(10⁴)L, HGB10.8L, 白血球 46.0(10³)P, 血小板 2.3L(10⁴), 薬処方：尿酸の薬

20x2年1月18日

地域がんセンター受診

16日行った血小板輸血の結果、落ち着いてる？（安定してる）と言われた。医師より折角来ているからと血小板輸血をしておきますと言われて行った。血液検査では、白血球数が3万7,500個に減っていた。肺レントゲンと心臓エコー検査を行った。

来週2回（23日と25日）血液再検査して治療（入院）を考える事になった。

血液検査：尿酸 3.1L, LDH658H, CRP2.14H, 赤血球数 398(10⁴)L, HGB11.6L, 白血球 37.5(10³)P, 血小板 3.4(10⁴), 薬処方：痛み止め、胃薬、抗生物質、

20x2年1月21日（第3回）

鍼灸治療

督脈穴一胸骨部ダルマ2個、足三里へ透熱灸5壮。後頸部置鍼。触診：頸部一腋窩のリンパ節の腫脹は触知できない。

*臀部の痛み（左<右）は薬を飲めば治まる。

身体所見で頸部一腋下のリンパ節主張は触知できない。

*発熱（微熱）、倦怠感、息切れ、めまい、ふらつき、痛み、出血しやすく血がとまらない、あざがでやすいなどはない。

*十全大補湯服用（2週間）を始める。

20x2年1月23日

地域がんセンター受診

血液検査：アルブミン 3.8, 尿酸 2.4L, LDH721H, CRP2.42H, 赤血球数 365(10⁴)L, HGB10.7L, 白血球 46.0(10³)P, 血小板 2.1(10⁴)P, 薬処方：抗菌剤（肺炎予防）、痛み止め。*輸血を行う。

20x2年1月26日

地域がんセンター受診

31日の入院は、キャンセルした。抗ガン剤の治療を勧められた。このままのリスクは、出血で脳出血を起こすことが心配と言われた。血小板輸血は、頻回の続けると抗体が出来ることがあるのでそうすると厄介になるとのことで本日は行なわない。右胸部の腫瘍、肝臓、膵臓の腫瘍は生検をしていないが、同じ白血病細胞のせいだから白血球が減れば大き

くなることはないとのこと。尿酸を下げる薬、痛み止め、胃薬が処方された。

血液検査：尿酸 5.8, LDH750H, CRP1.55H, 赤血球数 354(10⁴)L, HGB10.1L, 白血球 47.2(10³)P, 血小板 2.8(10⁴)P, 薬処方：尿酸の薬。

20x2年1月28日

鍼灸治療

昨夜から鼻血が止まらない。

右臀部の痛みが強く座ってられないぐらい。

右胸に痛みがでてきた（今までにはなかった）

督脈穴一胸骨部ダルマ2個、足三里へ透熱灸7壮。

右臀部 EAT 1 Hz 10分。

後頸部置鍼。触診：頸部一腋窩のリンパ節の腫脹は触知できない。

*臀部の痛みが強い（左<右）。

身体所見で頸部一腋下のリンパ節主張は触知できない。

*発熱（微熱）、倦怠感、息切れ、めまい、ふらつき、痛み、出血しやすく血がとまらない、あざがでやすいなどはない。

*十全大補湯服用を始める。

20x2年1月28日

地域がんセンター受診

鼻血の処置を行う。症状の経過をみる。

経過からの考察

誤解がないようにと思います。お灸で白血病が治ったと伝えたいわけではありません。白血病と診断されてからも白血病の特有症状がなく、少し、疲れやすさはあったが食欲、睡眠、便通など普通の状態で生活できていた。年齢から治療の選択は、①抗がん剤での治療を提案されるだろうが、同年齢で抗がん剤治療が行われた例がないことから考えづらい。②抗がん剤治療をしないで緩和を目的に痛みの除去と今の生活状態を維持していく。③日常生活では、かぜを引くことを一番注意しなければならなので自分の免疫力を食事、運動、お灸治療などで維持していくか。などが考えられると思います。

治療の選択は、地域がんセンターの医師の考え、本人の希望（意思）と家族の希望（意思）を考えて決めなければならないが、難しい選択になるかと思う。